HENRIELL FOUNDATION

2024年度
高校生カンボジアスタディツアーで学んだこと

立命館守山高等学校 S.H

はじめに

7月29日から、8月5日までの1週間、第８回カンボジアスタディツアーに参加いたしました。在カンボジア日本大使館、UNESCOプノンペン事務所、キリングフィールド、寺子屋やそこに通う方の家庭訪問、アンコールワット見学、アプサラダンスの鑑賞など、大変充実した学びを得ることができました。

参加のきっかけ

私には、世界の子どもたちの医療や教育に貢献し、そのためのシステムを整備させるという将来の目標があります。そのために、アプリコンテストや、ビジネスコンテスト、化学研究プログラム、台湾やフィンランドへの海外研修などに参加してきて、たくさんの経験を積んできました。しかし、自分が将来貢献したいと思っている発展途上国には一度も訪れたことがなかったです。

私は、上記のようなコンテスト活動を通じて、「自分の想像と、実際の現状ギャップ」と実感することが多いです。だからこそ、夢の実現に向けて、実際に途上国に訪れて、現地の方が何に困っているのかを自分なりに理解したいと感じたのが参加のきっかけです。

学習施設の訪問

寺子屋訪問

私たちは、8/2にリエンダイにある寺子屋に訪問しました。現地の子供たちは、週に六日、1日あたり4時間学習するというカリキュラムで勉強しているそうです。

私たちは、現地の子供達に折り紙を教えたり、一緒に扇子を作成したりしました。言語もほぼ通じない中、きちんと話を聞いてもらえるのか、また日本の文化を楽しんでもらえるのかなど、実施する前は心配でした。しかし、実際に行ってみると、現地の子供たちはみんな、「何か新しいことを吸収すること」をすごく楽しんでいて、真剣に話を聞いてくれました。寺子屋での授業に実際に伺い、みんなで質問した際にも、1番好きなことは勉強であると答える生徒が多かったり、勉強に関しても、日本の生徒の何倍も真剣に取り組んでいました。

しかし、現地の寺子屋には冷房はなく、部屋に一つか二つシーリングファンがあるだけで、とても暑いです。現地の方たちは慣れている様子でしたが、私は部屋の中にいてもずっと汗が止まりませんでした。机についても、日本のように一人あたり一つ与えられるわけではなく、汚れた長い机と椅子をで何人かの学生が一緒に学習するスタイルでした。

この他にも、印象的だった出来事があります。それは小学生クラスの生徒たちと中学生クラスの生徒たちの両方に将来の夢は何かと質問したときのことです。小学生クラスの生徒たちが、医者やバスガイド、コックさんなど多様な職業を夢にしているのに対して、中学生クラスになると、志望する職業の種類がかなり減った印象を受け、医者に関しては1人もいませんでした。私はこの現状に疑問を抱いて質問したところ、「年齢を重ねるにつれて、その職につく難しさを理解するようになり、諦めている可能性が高いと」回答されました。寺子屋には、家の手伝いをしながら通う生徒も多いです。そのため、職業を諦める理由は、職につく難易度だけでなく、勉強を十分にこなす環境がないことも一因だと考えます。また、研修を進めるうちに、小学生くらいのうちからある程度将来の職種を定めておかないといけない場合があることもわかりました。人によっては、全ての科目を完璧に履修できるとは限らないので、幼いうちからある程度将来の職種を絞ってそこに向けた専門的な勉強を進めるそうです。

それでも、寺子屋で困ったことはあるかという質問に対しては、特にないという回答が返ってきて、現地の生徒たちは、不満を抱くことなく今の環境でできることに精一杯取り組んでいるという印象を受けました。

以上の経験から、学びたいという強い思いを持っているのに、勉強する環境が十分でなく、就きたい職業を諦める場合があることがわかり、複雑な気持ちになりました。そして、日本ではよく、「世界には、勉強をしたくてもできない子供たちがいるのだから、恵まれた環境にありがたいと思ってがんばりなさい」と習います。しかし、今回のツアーを通して、自分の置かれた環境に感謝するだけでは不十分であることに気がつきました。世界の教育の現状を知った今、今の自分や将来の自分にできることは何かと考えるきっかけとなりました。

学習者の自宅訪問

寺子屋訪問の後に、寺子屋の学生の自宅に伺いました。

洪水を凌ぐために家が高床になっていたり、周りに犬や家畜などの動物がいる光景をみるなど、現地の特色に触れることができました。

また、この家のお母さんは、草で作った畳を編んで売っているそうなのですが、その価格が18ドルで、私たちが外食で食べたランチの値段とそれほど変わりませんでした。さらに、エアコンがないことから、夏場はなかなか寝られないということを聞きました。このことから、物を正当な価格で取引する仕組みがない可能性や、貧富の差が大きい可能性があると感じました。

少しずつ発展してきているという印象だったカンボジアですが、いまだに経済格差が残っているのではないかという印象を受けました。

識字クラスの訪問

私たちは、小学校クラスだけでなく、識字クラスにも訪問しました。識字クラスとは、学生時代に十分な教育を受けられなかった大人に勉強を教えるために開講されたクラスです。このクラスの特徴は、通っている大人のほとんどが女性であるということです。これは、圧倒的に女性の方が識字率が低いことが原因です。昔、女性は料理や家事など女性らしい行動をしなければならないというしきたりが強く、勉強する機会があまり与えられなかったそうです。日本にも、昔にそういうしきたりはありましたが、カンボジアでは今でもなおその影響が大きいということに、悲しい気持ちになりました。

また、文字が読めないせいで油や洗剤を水と勘違いして子供に与えてしまうなどの事例も知りました。日本では、全ての子供が義務教育を受けられる環境があるので、文字が読めないことについて深く考えたことはありませんでしたが、この出来事を通じて、字が読めることや計算ができることが当たり前ではないと実感するようになりました。

また、識字クラスも、恵まれた学習環境ではありませんでした。開講時間が18時から20時までと遅いにも関わらず、電球が一つしかないのでとても暗いです。さらに、先生の給料がそれほど高くないので、教員不足にも直面しているそうです。今でも教育ボランティアなどはたくさんあり、それもとても大事なことだと思いますが、教育に携わる人の給料を見直すなど、根本的なシステムを少しずつ変えていく必要性を感じました。

キリングフィールドの訪問

キリングフィールドへの訪問も、強く印象に残っています。まず、犠牲になった人たちの頭蓋骨が積み上げられたケースを見たり、虐殺した人やされた人の写真を見たりして、心が痛くなりました。他にも、実際に人が収容されていた施設や拷問の様子、さらには結婚相手すらも勝手に決められたことを知り、当時の様子がよくわかりました。

しかし、例外的に虐殺や拷問の対象にならなかった人もいるようです。それは、その人が武器やなどについての専門知識がある場合です。私は、そのことを知って、人が自分にとって都合が良いか悪いかだけで処刑の対象にするのかを判断していたように感じました。

今では、国際社会で世界平和が謳われるようになり、戦争や虐殺をなくすために動いていると感じますが、貿易や外交においては、「その国や組織が自国にとって都合が良いか否かで対応を変えている」と実感することがあります。このことと、虐殺の歴史を関連づけるのは、少し違和感があるかもしれませんが、「全ての国に上下関係がなく、皆が対等であるという認識をみんなが持ち、本当の意味で助け合える国際社会」に近づいてほしいです。そうなることによってこのような歴史が2度と繰り返してほしくないと心から感じました。

その他印象に残っていること

マーケット

研修の合間に、シェムリアップとプノンペンにあるマーケットに出かけました。現地の方と交流しながら値切り交渉をしたり、可愛い服を購入できたりして、一言で表すと本当にとても楽しかったです。

しかし、後から振り返ると少し悲しい気持ちになる出来事もありました。カンボジアの通貨はドルとリエルで、4000リエルが1ドルに値します。しかし、マーケットにて、リエルでの支払いが生じるときは、リエル分の金額を差し引いてもらうことが多かったです。最初は、まけてもらえたのかなとしか思っていなかったですが、現地の教育の状態をある程度理解した上で考え直すと、計算ができない故に返すしかないという可能性に気づき、複雑な気持ちになりました。

まるまる一つのココナッツがジュースとして売られていたり、現地のフルーツを用いたスムージーが濃厚でとても美味しかったり、カンボジアで美味しい洋食が売られていたりなど、新鮮な発見がいくつもありました。食事中に野良猫やハエ、ゴキブリに遭遇することもあり、現地の衛生環境を知るきっかけにもなりました。

食事中に琴の演奏や、アプサラダンスという現地の舞踊を鑑賞することもありました。特に、アプサラダンスについては、ポルポト政権時代に一度失われかけましたが、現地の人々の努力によって少しずつ復旧してきた歴史があると知り、感動しました。

食事

仲間との出会い

このツアーは、主に教育や文化に学ぶことが多かったですが、参加者は、環境問題や医療問題、国際問題など、それぞれに興味のある分野があったり、将来やりたいことは少しずつ違ったような印象を受けます。だからこそ、みんな違う方法で途上国に貢献したいと考えていることを実感して、視野が広がったように感じます。

その他にも、みんなでコオロギやタランチュラを食べたこと、夜に部屋でたくさんおしゃべりしたこと、メンバーやカンボジアの子達と鬼ごっこしたことなど、全てが思い出です。このメンバーで行けて本当に幸せでした。

さいごに

「仲間との出会い」の項目で、軽く触れましたが、私は、カンボジアに行く前の事前学習にて、メンバーが国際系や教育系などを中心に興味を深め、活動したり、アクションを起こしたりしていることに気がつきました。しかし、私の他に「途上国が抱える医療問題」に興味を持っているメンバーは少なく、事前学習での発表内容も他の人と少し違うように感じていました。さらに今までの活動に関しても、他のメンバーが寺子屋のリーフレット制作などのボランティア活動が中心であるのに対して、私はサイエンスコンテストなどを中心に行ってきて、これまでの取り組みも人と違うことから最初の方は、少し不安もありました。

でも、いざツアーに参加してみると、そんな不安を抱く必要はなかったと実感するようになりました。なぜなら、発展途上国が持っている課題は、全てがつながっている様に感じたからです。例えば、現地にて、学習者の家訪問をした際、女性が1週間かけて編む畳の値段が外食のランチ一食分に相当することから経済格差を実感することがありました。しかし、この課題を解決するためには、金銭的な支援だけでなく「職業の選択を増やせるようにするための教育支援」や、「貧困地域にも医療を届ける医療支援」さらには、「他国の人にこの現状を伝える」ことなど、様々な支援が必要です。

つまり、これは、自分の興味のある分野から、発展途上国に対して多様な貢献の仕方があるということです。だからこそ、「国際社会に対して何か自分にできることはないか」と考え、自分なりに行動を起こしたことがある人であれば、臆することなく、ぜひ挑戦してみて欲しいです。そして、カンボジアの文化や現地の人々の生活を実際に見ることによって、自分が国際社会にできることを探れる絶好の機会をぜひとも掴んで欲しいです。

そして、このような最高な機会を作ってくださった日本ユネスコ協会連盟の皆さんおよびかめのり財団の皆さんに深くお礼申し上げます。この経験を通じて、「世界の子供たちの健康に貢献できるシステムを作る」という将来の目標を叶えられるように頑張ります。